標本棚 私と小動物

ネズミ退治奮戦記

横浜国立大学名誉教授　青木　淳一

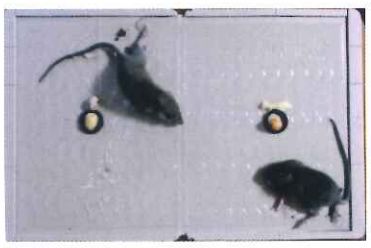
「トッ、トッ、トッ」と天井裏で音がする。「あっ、またネズミだ！」と家内と目を合わせる。我が家はもう築後五十年の古い一軒家である。

ネズミの同居人くらい居て当たり前だが、年金暮らしの老夫婦の食べ物を横取りされてはかなわない。そこで、さっそくアペックス産業の元木社長にお願いして粘着版を購入し、一階の台所、居間（食堂）、仕事部屋、物置、二階の洗面所、息子の寝室に一枚ずつおいてみた。口には出さねど、「そう簡単にはかかりませんよ」と元木社長は思っていたらしい。

なるほど、三週間たっても一匹もかからない。それどころか、私と家内がかかってしまった。友人が布を撚って編んでくれたスリッパなので、粘着版を設置した場所をうっかり忘れて踏んづけてしまうと、容易なことでは剥がれない。ベンジンをたっぷりつけてもなかなかとれない。

しかし、設置後二十四日目、ついに成獣一匹がかかった。それからは次々とかかり、八月二十八日から十月二十五日までの間に幼獣三十四匹、成獣二匹、計三十六匹が捕獲された（多い日には一度に六匹）。

それからは食べ物をすべてキッチリと蓋の閉まる容器に入れた。それでも腹の減ったネズミは、驚いたことに観葉植物の葉、漢方薬、つばき油、風呂場の石鹸まで食べてしまった。腹を壊さないかと心配だ（いや、心配などする必要はない）。



そして今年の四月、一匹の大ネズミの捕獲を最後に、天井裏は静かになった。やれやれ。

ムクインとセ・ピカ

アペックス産業（株）業務課　石川　諒

中央アメリカの草原には、印象に残るダニがいる。

あれはコスタリカにほど近いリオ・サンファンの畔にいたときのことだ。湿疹ができた足を掻きながらハンモックの上で休んでいると、同じく休んでいた若い兄ちゃんが私の足を指しながら「セ・ピカ、セ・ピカ（あいつが刺してるぞ！）」と、ひっきりなしに言ってくる。

事実、前の晩の草原でライム・トラップ（昆虫採集の手法の一つ）で、蛾のメダマヤママユ（写真）がかかるのを楽しんでいた私は、そのさなか何度も足の甲あたりを何かに刺される感触を覚えていた。迂闊にもサンダルで草むらを歩き回ったいたせいではあるのだが、その都度刺された箇所を確認するも、不思議なことに犯人と思しきものは一切眼に映らなかった。

あとで気になって調べると、どうやら私は目に見えないぐらい小さなダニに刺されているようだった。このような草むらに住む小さなダニの仲間は、例えば同じ大陸のブラジルなどでは、「ムクイン」などと呼ばれているらしいことも分かった。

しかしながら、言語も異なり遠く離れたこの地では、私は一体なんと呼ばれているものに刺されていたのか？今となっては知る由もない。私は彼らについて知っていることは、彼らに刺されたときに「セ・ピカ」と呼べばいい。それだけである。

羽音

江戸城築城の秘話（その四）

江戸の飲み水として真水の確保

江戸文化歴史研究員　窪田　孝

江戸の地は小石川、平川の土砂がつくる、海抜一メートル前後の砂州であった。東側は旧石神井川、隅田川が江戸湾に注ぎ、広大な湿地帯であった。

日比谷入江は日比谷公園、大手町あたりまであり、東側の江戸前島は現在の千代田区（大手町、丸の内、有楽町、内幸町）、中央区（日本橋、宝町、銀座）の範囲で鉄砲洲あたりまで伸びていた。

天正十八年（一五九〇年）江戸入府前に江戸の水事情を知った徳川家康は、大久保藤五郎に真水の上下水道の整備を命じた。

小石川と白山方面からの支流が合流し、飯田町から南に流れ、平川に合流し日比谷入り江に注いでいた。

江戸名所図会「溜池」　向いの丘は現国会議事堂

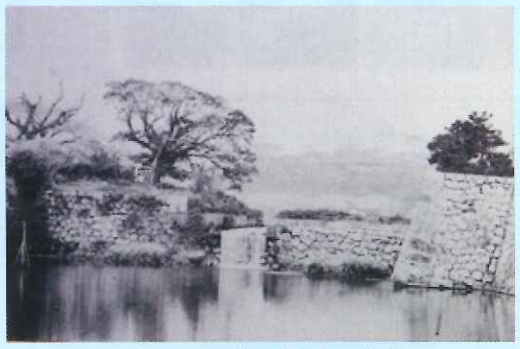
藤五郎は井の頭池、善福寺池、妙正寺池からも取水し、寛永六年（一六二九年）井の頭池を主な水源とする小石川上水を建設し、家康から主水《もんと》の名を与えられている。

江戸の最初の水道として、神田上水に拡張発展したと言われているが、その詳細、流路及び規模に関しては定かではない。

一方、汐留川に堰を造って水をためた溜池として慶長十一年（一六〇六年）に完成し、城南の水道に使用された。

湿地帯を虎の門でせき止め赤坂御門まで1.4Kmの細長い池は外堀の一環として、また行楽地としても使用された。

溜池は承応二年（一六五三年）玉川上水が完成したあとは、必要性が少なくなり、少しずつ埋められていった。



虎ノ門で堰き止められた溜池

私と小説

詩人・小説家　関口　彰

小説を書くにあたり、作家としてその作品へのスタンスを何も考えずに書き出すとしたら、その資格を問われても仕方あるまい。

〈何を書くか〉の前に、〈自分に取ってその作品を何故書かなければならないのか〉況んや文学での芸術（特殊の材料・技巧・様式などによる美の創作・表現）行為としての意識を持つなら、〈対象目標をどこに置き、自己の技量への冷徹さから、いかにテーマを煮詰めるか、等々〉それらはまず前提条件になろう。

ところがこの時代は、解りやすく面白くなければダメといった一大娯楽（エンタメ）ブームである。まさに大衆レベルに媚びた価値観ばかりが横行している。本来の〈作者が作品を生み出すのにどれだけ血を流したか。再読を強いるような感動なり、味わい深いフレーズにどれだけ出会えたか〉といった純文学は嫌われている。

この度出版した私の『業苦の恋』は、以前からこれだけは書いておかなければの気持ちで取りかかった小説だが、果たしてどれだけ血を流し、目標に一歩だけでも近づけたか、それは読者に委ねざるをえない。

ちょっと…そこまで

有薫酒造新橋店

今回のご紹介は、JR・地下鉄新橋駅近くの「有薫酒造新橋店」です。一九七八年に開店。きびなご、ムツゴロウ、ワラスボ、おきゅうと、など九州から取り寄せた旬の食材を使った料理と地酒を提供するお店です。

料理はもちろんのこと、三十年前から始めた「高校よせがきノート」がマスコミで紹介され、一躍有名になりました。

これまでに寄せられた高校名は全国の高校の六五%。ノート三千百七十八冊に及びます。去る十月八日には新橋第一ホテルで「高校よせがきノート・三十年・三千校を祝う会」が開催されました。（写真）

女将の松永洋子さんの父は作曲家・福田蘭童氏。祖父は画家・青木繁氏。兄弟にクレージーキャッツの石橋エータロー氏。場所：新橋駅日比谷口前・りそな銀行ビルB1、電話03－3508－9296、営業時間午後五時から十一時半。（土曜日は午後四時半から十一時）定休日（日曜・祝日）

3000冊を超える「高校よせがきノート」を背に挨拶する女将。

触覚 BOOK

業苦の恋

関口　彰 著
鳥影社
1600円（税別）

今号の「触覚」では、「羽音」に寄稿いただいた関口彰氏の『業苦の恋』を紹介いたします。

＊　＊　＊

男にとって究極の女とは……。

青春であればこそ二人の詩人は、激烈な恋に命を懸けた。

一人は哀切な思慕の嵐に漂流し続け、一人は愛恋の狂気に殺意を抱く。

この対照的な恋の実話は、日記をもとに、織り込まれた詩がひとつの舞台を演出し奏でる。愛しい人よ、あなたはこれをどう読むか。（帯封より）（他に三編を収録）

＊　＊　＊

文中には詩が何編か挿入され、本格的な文藝作品独特の重厚感溢れる小説です。決して軽く読み下せるものではありませんが、自らの青春時代の恋のときめきを思い出しながら、じっくりお読みください。

むしくいず

問題　虫の字が入ることわざや格言はいろいろあります。その一例をピックアップしてみました。

左のことわざの一番下の「雪の明日は□虫の洗濯」の□に入る漢字をお答え下さい。

一寸の虫にも五分の魂
獅子身中の虫
小の虫を殺して大の虫を助ける
蓼食う虫も好き好き
飛んで火に入る夏の虫
苦虫を潰したよう
腹の虫が治まらない
鳴く虫は捕らえられる
雪の明日は□虫の洗濯
↑

◆応募規定　ハガキまたはファクシミリで、答え、住所、氏名、当社との関係を明記の上、ご応募ください。
〒105-0014　東京都港区芝２の23の４
アペックス産業㈱内　ＡＰＥＸ ＣＬＵＢ宛
ファクシミリ番号　03-3455-6558
締切は平成31年２月末日（当日消印有効）
正解者の中から抽選で若干名様に記念品を差し上げます。

★前号の正解と当選者（順不同）
正解は『三波春夫』でした。
当選者は：伊藤靖忠、平野徹、網屋勝の３名様です。